

APMoA Project, ARCH vol. 13 伊東宣明の個展「アート」も会期がわずかとなりました。そこでここでは、新作《アート》について、制作の裏側も含め少しお話ししたいと思います。

この作品は伊東宣明本人が日本各地を移動して少しずつ自画撮りを行い、編集で各場面を繋げると、「アートとは何か」という一つの壮大な語りが生まれるというものです。違う場所、違う時に撮影したものを繋げて一つの動画とする方法は、様々なPVなどで既にお馴染みのものです。例えば、こちらファレル・ウィリアムスの”HAPPY”。

しかも、アマチュアであっても、この撮影方法、編集方法を使えば、何だか楽しい動画が作れてしまう。動画投稿サイトで目にすることも多いかもしれません。

伊東もこの方法にならって、様々な場所で撮影を行っています。北は青森の恐山、森美術館や国立西洋美術館、豊田市美術館等の施設内、そして直島行き港まで、皆様もご存じの場所が登場するかもしれません。撮影にご協力いただいた皆様には、本当に感謝、感謝です。



↑佐久島の浜辺にて。南川祐輝《おひるねハウス》で楽しむ方々を横目に撮影に励む。



↑ヴィルヘルム・レームブルック《立ち上がる青年》の前にて撮影。レームブルックの彫刻がなんだか迷惑そう……。

さて、このように伊東の映像は背景がくるくる変わるので、キャッチーでとっつきやすく感じられます。しかし、語られる内容は「アートとは何か」という極めて壮大な問い。しかも、その問いに対して伊東は答えまで用意しています。それに対して「なるほど、なるほど。そうだったのか！」と納得してもOK。はたまた、露悪的な教養番組のパロディとして笑いとばしてもOK。

それにしても、美術館の展示室をめぐる「芸術とは何か！表現はどうあるべきか！アートとは何なのか！」という悩める声が聞こえてくるようです。愛知県美術館に並ぶ作品も、作り手それぞれが悩み奮闘した成果と言えるかもしれません。

けれども、反対に言うと、その悩み闘う姿に芸術家らしさを見出すという面もあります。「凡人には到達できない高みを目指して戦う」人物こそ、芸術家らしい、というわけです。THE 芸術家神話。そして、そんな人物が動画投稿サイトでセルフィーするとはいったい…！？

映像内には、岡倉天心、高村光太郎など、日本の近代美術の成り立ちに貢献した人物や彼らの作品も

随所に出てきます。彼らの唱えた芸術の理想を少し思い浮かべながら見てみてもいいかもしれません。

(F. N.)